～医療生協健文会の職員のみなさま～

メロス通信 不定期便

Vol.15

2024年1月号

発行：地域福祉室

遅ればせながら、
新年あけましておめでとうございます。

地域福祉戦略部長　　野田浩夫

元旦午後に突然襲った能登半島地震の甚大な被害が日々拡大しながら、今日に至るまで支援が遅々として進まないことに心が痛みます。山口県もその中に含まれる人口減少過疎地域に生じた災害の対処困難さを考えさせる典型例としても、まさに自らのことと捉えて注目して行きたいと思います。災害において人口減少の過疎地域が切り捨てられるという前例にならないことを切に願うものです。

地域福祉室は2021年11月にスタートして満2年を経過しましたが、アウトリーチと伴走的支援に特化した部署として十二分に存在意義を示しえたと思います。独自の「友の会」もできて、生活困難者の当事者運動と一体化する側面も備えつつあります。若手職員、医学生、看護学生、福祉学生が社会の実態に生で触れることのできる貴重な教育の場とする点でも準備が進んでいます。

患者・利用者の生活支援はすべての医療・介護活動の土台として、貧困・格差・孤独の深刻化、社会保障費削減政策の進む中でますます重要となっています。生活と健康を守る会、働くもののいのちと暮らしを守る山口センターなどの外部の諸団体や、県連内各部署との協力を深めて前進したいと思います。

それらの点で今年は一層の飛躍が必要な年となりますので、職員・組合員のみなさんのご協力を心からお願いするものです。

さらに個人や世帯の支援を超えて、地域の抱える脆弱性そのものにアプローチする、コミュニティ・ソーシャル・ワークは「地域共生社会」の幹となるものです。地域共生社会について国の政策が掛け声だけに終わっている現在、私たちにこそその実現が委ねられているものと捉えて、そのためにも必要な「地域主権」やFEC自給圏の実現にむけ大胆な構想力を養いたいとも考えています。

私個人としては、民医連に先行する鎌倉時代の僧、忍性（にんしょう）や明治時代の医師大石誠之助の事蹟など歴史的な探求と合わせて、未来を指し示す「ケアの倫理」と民医連の合流、さらに「自然と人間の共存を切り拓く新しいマルクス主義」と民医連の合流などの検討を新たに始めたいと考えています。どのようなものになるか、まだ見当がつかないところですが、少しばかりご期待いただきたいと存じます。

県連ソーシャルワーク委員会報告

1月の県連ソーシャルワーク委員会から、職員教育の視点で、社会福祉士の有資格者職員がオブザーバーとして参加しています。県連ソーシャルワーク委員会は、「ソーシャルワークを土台にした医療活動」を軸とした医療活動を展開するために設置された委員会です。毎回、各事業所からの生活困窮事例や社会的困難を抱えた患者さんの事例などを報告・協議しています。その多くがSDHが深く関係している事例です。そして、解決に向けた協議とともに、病気と貧困と孤立がどう連鎖しているか考えています。SDHの視点で事例を検討すると、健康の自己責任というものはないということが明らかになります。そのため、解決策は個別対応に留まらず、健康格差をなくすために、健康に関する対策・政策提言として行政との交渉・懇談も行っています。

オブザーバー参加した職員からは、「大学で学んだことが、実際に地域で起こっていることに驚いた」「実際のケースにかかわった職員から直接聞くことのできる貴重な機会でした」といった感想がありました。

地域福祉室からのお知らせ♪

『GYALOS（ギャロス）』
始めます！！

社会福祉士および有志の事務職員・看護師・コメディカルなどで時間外の学習会を企画しています。

楽しく、学び合いましょう！！
詳細は、近日中に
お知らせします！